

生涯学習とフランス語教材

OMIYA Shihō / INOUE Nozomi / MINAMI Reiko
近江屋 志穂 / 井上 のぞみ / 南 玲子

Université des ondes

shihomiy@hotmail.co.jp / nozomin@iwate-u.ac.jp / reikomnm@hotmail.co.jp

Nous présenterons les matériels pédagogiques que nous avons exploités pour les deux nouveaux cours de français du niveau débutant, créés en 2005 à l'Université des ondes et adressés aux apprenants adultes de diverses générations.

はじめに

放送大学の「面接授業」では、2005年度に初学者のための「初歩のフランス語」が新設され、2006年度には「放送授業」改編にあわせて「フランス語入門Ⅰ」も始まった。面接授業とは教室での授業、いわゆるスクーリングの科目である。授業時間は1コマ2時間15分（途中15分を休憩にあてる）であり、合計5コマ、10時間行う。毎週1コマで5週間つづく「毎週型」、土日ばかりを選んで2～3週間にわたって開かれる「土日型」、そして8月や2月に2～3日で行われる「集中型」の3種類がある。授業の多くを電波で受講する放送大学の学生にとって、面接授業は教室の中で講師や他の学生とともに学べる貴重な機会になっている。講師の側は、放送授業で欠けている学生との交流や生の指導という点を補うことが求められる。その際、年齢、職業、関心の所在などが実に多様な受講者の各々が、一定レベル以上の達成感を抱けるよう留意する必要がある。

そこで放送大学では、工藤庸子教授の指導の下、講師たち自身が取材から構成、編集、ときに複製までを分担しながら、受講者層にあわせて使い方を工夫できるようなオリジナル教材を低コストで開発し、活用するという試みを進めている。これらは近年盛んに開発が進められているIT教材ではなく、テキスト、CD、DVDなどの従来型の教材である。それは、放送大学の特徴に沿い、多様な学生層のニーズを満たしつつ、同時に放送授業の補助という面接授業の特性を活かす教材として、従来型の教材の方が適していると判断されたためである。本稿では、これらの教材を紹介するとともに、実際の授業での経験や受講者に対するアンケートの分析を通して、我々の教材開発の成果について報告する。

I. 「カラー教材」と付属 CD（初歩のフランス語）

1. 「初歩のフランス語」

この授業は、全くの初心者が、フランス語及びフランスの文化に触れ、さらに継続して学習していきたいという積極的な願望を抱くよう誘導することを目標とする。語学的には文法以前の事柄を扱う。通常、初級用のフランス語の教科書は、アルファベットから始まり、つづり字と発音の規則を概説した後、avoir, être の活用、er 動詞の活用といった文法事項に入るが、ここではそうした事柄には触れない。この授業は初級文法を学ぶ「入門 I」への橋渡しとして構想されているのである。受講者が本格的にフランス語の学習を始める前に、簡単なフランス語を繰り返し発音してフランス語の音に慣れ、また、フランスがどのような国であるのかを大まかに学ぶ、というのが「初歩のフランス語」のねらいである。

2. 「カラー教材」と授業構成

「初歩のフランス語」の教材として開発されたのが A4 サイズで全 6 頁の「カラー教材」である。最初の 2 頁に、アルファベット、1 から 12 までの数、挨拶や自己紹介のしかた、カフェでの注文の表現や食べ物・飲み物に関する単語など、この授業で学ぶべきフランス語の基本が記載されている。3 頁目以降は、パリ、フランス、フランス語圏、ヨーロッパのカラー地図や写真、フランス史の略年表で構成されている。

この「カラー教材」をもとに、初めの 2 回の授業で 1, 2 頁の語学の基本を集中的に学ぶ。第 3 回～第 5 回は、パリ、フランスの地方、フランス語圏をテーマとしていわゆる講義を行うが、基本事項の復習も兼ねる。全体を通して、文化的・社会的情報の伝達と語学の授業とが絡み合うように工夫することが求められる。

3. 教材の作成過程

「カラー教材」作成にあたっては、講師たち自身で用意したイラスト、図版、写真を用い、印刷所を通さず PDF ファイルを作成して印刷したため、低コストで実現することができた。カラーを使って見やすくする工夫をした他、なるべく情報量をおさえるよう留意した。それは受講者が分量に圧倒され、フランス語を難しいと感じることがないように、また担当講師にとって、ゆるやかな授業規定となるよう配慮したためである。このようなかたちの教材は改訂しやすいというメリットもある。授業中の発音練習のためには、IC レコーダーを使ってネイティブのフランス語講師の発音を録音し、データを音声形式で保存した付属 CD を作成した。この他に、パリ、フランスの諸地方、フランス語圏についての情報や「入門 I」の予習用の「つづりと発音の規則表」などを収録した「教師用文字データ CD」も用意した。

4. 実際の授業

初年度は、関東の 4 箇所学習センターで開講された（アトリエ当日は時間的制約により、「毎週型」の埼玉学習センターと「集中型」の世田谷学習センターの例に触れるにとどめた。より具体的な授業展開例は、当日配布した研究紀要の「授業報告」にある）。これまでの経験を通して言えるのは、「毎週型」の場合、週 1 回のペースで 5 回授業が行われるため、毎回復習の時間をとることができ、学習事項の定着率も高く、「カラー教材」以外の事柄を導入する余裕もあるということである。「集中型」は逆に

予復習の時間はほとんど期待できず、また受講者の集中力の保持という課題もある。これには学習内容を最低限に絞り、授業中の反復練習を徹底すると同時に、基礎知識習得に集中する時間、関連する音楽や映像と親しむ時間、とメリハリをつけることで対処した。短期間学習の限界はあるが、この方法により、何かひとつでも身に付けたという達成感を感じ、次のステップへの学習継続意欲を抱く受講者が多く出た。

II 「復習問題」(入門 I)

1. 「入門 I」

初級文法を学ぶ面接授業「フランス語入門 I」には、同じ科目名の放送授業、および対応する教科書「印刷教材」がある。テレビや各学習センターの図書室で視聴できる放送授業は全 15 課 (1 課あたり 45 分) の講義からなり、面接授業は放送授業の補習、復習の役割を担う。面接授業 5 コマで 15 課分の内容を網羅することは当然不可能なので、終わられるのは半分の 7 課程度である。この授業は、すべてに目を通すことよりも、理解してから先に進むことが受講者から期待されている。

2. 「復習問題」と付属 CD

面接授業の「入門 I」では、「印刷教材」各課の末尾にある「練習問題」を補う目的で、「印刷教材」に沿った「復習問題」を作成した。「復習問題」の構成に際しては、要点を押さえつつ、「カラー教材」と同様に圧迫感を与えないよう留意した。そのため、1 課につき A4 一枚に限定し、余白も多くとっている。プリントのほかに、教室で流す目的で、解答例のほぼすべてを IC レコーダーで収録した音声 CD も作成した。

3. 「復習問題」と CD の利用法

2006 年度は、「復習問題」を基本的に宿題として活用した。CD 音声を流して答えを合わせ、質問を受けつつ、前の授業全体を振り返る。第 3 回までは授業の進度に合わせて問題を配ったが、第 4 回目には個々の学生が自分のペースで利用できるよう、残りの課すべての問題と解答集を配布した。ひととおり学んだ人や期間中に目を通せる人には自習を促し、最終回に質問を受けた。面接授業「入門 I」には語学の学習を楽しめる層と、新しく始まる文法事項につまづきがちな層とが混在するが、面接授業独自の「復習問題」は、復習に力点を置いた授業構成とあわせて大変好評であった。

III DVD (全レベル共通)

1. 「オリジナル DVD」とは

放送大学フランス語は 2 年前から、どのレベルでも自在に使えるようなオリジナル DVD の作成に取り組んでいる。昨年 3 月の完成以来活用されてきた DVD として「フランス語補助教材」、「補助教材 bis」の二種類がある。これは若手研究者たちがビデオとデジタルカメラを持って取材をした成果である。取材地としては、フランスの南北の特徴を伝えるカルカソンヌとゲランドが選ばれた。DVD には、取材旅行の前後に撮影されたロワール地方やパリのほか、西アフリカのマリの写真も含まれる。2007 年度春からは、この試みに想を得た放送大学・東京大学共同制作の DVD も両大学で使用されている。

2. DVD 教材の特徴と作成過程

DVD「補助教材」にはスライドショーとビデオ映像の二種類が収録されている。このスライドショーは特筆すべき新しい試みで、静止画像と単語を組み合わせた *Vocabulaire* シリーズと、同じく画像と簡単な文章を組み合わせた *Expressions* シリーズからなる。作成にあたっては、取材成果から喚起力のある写真を選び出し、単純な単語や文章をあてはめ大まかな構成を作ったのち、ICレコーダーで録音した音声データを PC に取り込んだ。映像の切替デザイン、字幕デザイン、音楽は専門の編集者に依頼した。二通りの読み上げ速度やスライド番号の音読も、利用法の可能性を広げている。ビデオ映像 *Langue vivante* も、南仏の活気を伝える印象的な字幕付きの映像に字幕部分をゆっくり読み上げる部分が随時挿入されており、教材として使いやすい。

3. DVD 教材の利用法

このように DVD 教材は、担当講師がそのときの受講者層のレベルや関心に応じて、語学から文化的背景の説明まで柔軟に利用できるように作られている。映像と音声のインパクトを活かすため、授業では受講者が目と耳に集中できる環境を作ることが望ましい。「初歩のフランス語」では、つづりと発音の関係の確認、数の学習、映像に登場する地域の解説などに使える。「入門 I」では、学習進度に応じて、名詞の性・数、冠詞、動詞の活用などに着目することで、多角的な復習の機会を創出する。

IV アンケート分析

分析対象は、「初歩」通常授業（2006 年度前期 [埼玉]）、「初歩」集中授業（2006 年度夏期・冬期 [世田谷]）、「入門 I」（2006 年度前期 [多摩]・後期 [世田谷]）の受講者に対する、初回と最終回のアンケートである（[] は学習センター名）。

1. 「初回アンケート」分析：

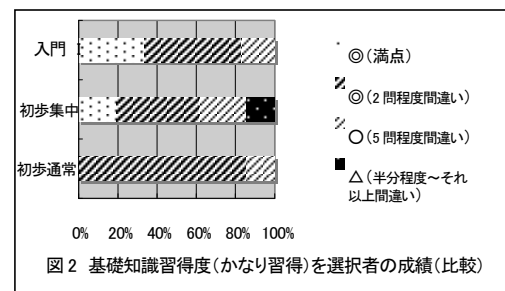
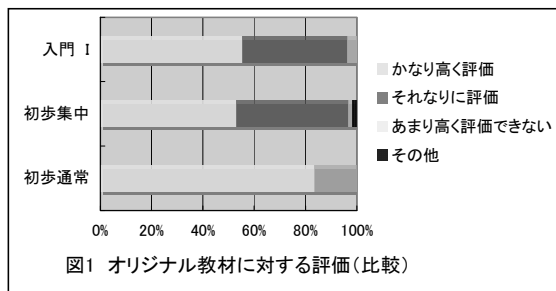
- ・ フランス（語）の経験：「初歩」では概ね「全く初めて」かそれに近い状態であった。「入門 I」では同名の放送授業を受講中、あるいは受講済みの者が大半で、多少の経験はあるものの、文法学習の入り口にいる人がほとんどであった。
- ・ フランス（語）と聞いて思いつく事柄：「初歩」受講者に自由回答してもらったところ、「文学、芸術、ワインとチーズ、ファッション、歴史的建造物、パリ」といった、ステレオタイプ化した回答が大半を占めた。
- ・ 授業への期待：「初歩」では「基礎、発音、簡単な会話表現、文化紹介」への要望が高かった。「入門 I」では「文化紹介」を求める声に代わって「文法」と「分かりやすさ」「楽しさ」への期待が見られた。

2. 「最終回アンケート」分析

- ・ オリジナル教材への評価：「かなり高く評価」と「それなりに評価」を合わせると、どの授業でも 9 割以上の受講者がオリジナル教材に満足していた。基礎知識の習得や反復練習に重点を置きつつもバラエティ豊かな広がりをもつオリジナル教材が、受講者の授業への期待に応える内容であることが証明された。
- ・ 基礎知識習得度（自己評価）と成績の関係：オリジナル教材をかなり高く評価

した受講者の基礎知識習得度と最終テストの点数の関係を見る。大半の受講者が一定程度以上に基礎知識を習得したと自己評価しているが、それは必ずしもテストの点数とは相関していなかった。これは、テストが単純に語学的知識のみを問うものであったのに対し、達成感にはそれとは別次元の要素が関連してくることが要因であると考えられる。「つづりが読めるようになった」「シャンソンの歌詞が聞き取れた」「文化的知識が深まった」といった多様な達成感を得られるよう工夫されたオリジナル教材の構成が功を奏したと理解できる。

- ・ モチベーション・学習継続意欲：オリジナル教材をかなり高く評価した受講者のモチベーションへの影響（初歩）、学習継続意欲（入門Ⅰ）を見ると、ほとんどの受講者が一定程度以上にモチベーションを高め、学習継続意欲を持ったと回答している。「初歩」および「入門Ⅰ」が最も重視している「モチベーション教育」は、一定の成果に結びついたと結論できる。
- ・ 自由記述欄から：受講者が当初抱いていた単一的で紋切り型の「フランスのイメージ」が、視覚や聴覚にうったえるオリジナル教材を通して多様な色を帯び、「新しいフランス（語圏）」のイメージを発見してもらえたことが伺える。また、具体的イメージを通して、フランス語を実際に使用している人々、社会、文化に受講者が興味を持ち、渡航意欲や学習意欲を高めるという成果が見られた。



終わりに

学会当日は、実際に放送大学の面接授業を担当された、あるいは今後される予定の先生方や、生涯学習としてのフランス語のあり方に関わる先生方を中心に、本発表に対して高い関心を示して頂き、より具体的な内容に関する質問も出た。また初学者を惹き付ける様々な工夫や、継続的で体系的な学習をサポートする体制作りに入れている点に関して、本プロジェクトへの高い評価を頂いた。特に「初歩」の「カラー教材」のコンパクトさとデザイン性、スライドショーを取り入れた DVD 教材への評価は高く、DVD は希望者への配布用に準備した部数を越えた需要があった。

この教材作成の経験は我々に、従来の素材にいかにか新しい工夫が加えられるかを示し、その利点を見直すよい機会を与えた。また、我々自身の他大学の授業での使用経験はもとより、本発表に対する反応の高さを鑑みても、一連のオリジナル教材が、生涯学習を担う放送大学の範疇を超えて広く一般の大学教育の現場においても有用な媒体であり、無限の広がりや成長可能性を秘めたものであると結論することができる。